

第 19 回リーディングセミナー オーガナイザー報告書



氏名・学年	平井佑治 博士課程 3 年
開催日時/場所	2016 年 10 月 26 日/北大獣医第 2 講義室
参加人数	学生 73 人、その他 8 名

講演タイトル	New insights in the pathogenesis of <i>Listeria monocytogenes</i>
講演者名	Marc Lecuit, MD, PhD
職名/所属/国	Head, Biology of Infection Unit, Institut Pasteur, France

招聘経緯・理由等	Dr. Lecuit は、報告者の研究テーマであるリステリア研究において先進的な成果を数多く報告している。近年、疫学的解析、全ゲノム解析、病原性解析を組み合わせることで、リステリア菌の hypervirulence に関わる菌株群および因子を特定したという報告がなされた。各解析が極めて高い水準で行われており、この論文の責任著者となっている研究者から直接話を聞いてみたいと希望すると共に、リステリア研究をしていない人でも、各解析手法の方法論は参考になると思った。 被招聘者とのコネクションは全くなかった。自身のラボでの受入に関する調整などに時間がかかり、最初の依頼メールを送ったのは、7 月半ばになった。札幌で行われた第 64 回日本ウイルス学会学術集会 (10/23~10/25) 後の 3 週間を対象として講演を依頼した。被招聘者より、“(第 64 回日本ウイルス学会学術集会と併催された) Global Virus Network (GVN) で講演予定なので、そちらとの調整した上であれば講演可能”との返信をいただき、10/26 に講演を依頼した。10 月に入ってから、開催に必要な CV や講演タイトルの提供をお願いした。	
セミナー、質疑応答について	講演は 70 分予定の計 90 分であったが、少し超過した。リステリア感染に関わる機構や因子の基本的な説明の後、感染の各ステップを順序立て、自身のデータを用いて、腸管の菌動態、菌と肝臓マクロファージ(Kupffer 細胞)との相互作用、胎盤への侵入機構、中枢神経系への指向性についての講演が行われた。データをかなり絞った内容であったが、キーとなるデータは外していないため、ついていきやすく、かつエネルギー満ちた講演と感じた。 講演中に留学生 1 名、日本人 1 名、閉会後に日本人 2 名から質問があったが、すべて快く引き受けてくださった。InlA に関わる自然選択圧、Kupffer 細胞に関わるシグナル反応、E-cadherin の発現箇所、疫学的解析手法の確認などがあつた。	
セミナー外の活動	23 日：空港ホテル送迎 (移動中にセミナー内容について確認) 24, 25 日：GVN (特になし) 26 日：午前観光 (大倉山展望台、北大博物館) →ラボ内で研究ディスカッション → (セミナー) →歓迎会 27 日：ホテル空港送迎	
反省点・感想等	使用教室は、講堂に先約があつたため、第 2 講義室で行った。講堂よりも机を広く使え、メモも取りやすく、講演に集中しやすいように感じた。また、前から見ている分には、会場のほぼ全ての椅子が埋まり、講演中の被招聘者の熱意も相まって、活気ある会となったと感じた。しかし、参加者側からすると、窮屈に感じたかも知れない。講堂使用のため、開始時間を早めるか、開催が決定した 7 月の段階で使用予定の先生に相談すべきであった。 準備期間や滞在中も含め、被招聘者が激務の中、わざわざ時間を割いて下さっていることを度々感じた。本人の負担を減らすためにも、ある程度内容を予想できる CV などについては、本人の許可あるいは、軽い訂正ですむような書類をこちらから提案できれば、よりスムーズな準備を行えたと思う。 観光先として北大博物館を選んだが、1F 展示の説明文が日本語しかなかった。展示内容は各学部の研究を一般向けにしたものとはいえ、英語で説明することは難しく、本人にうまく伝えることができなかった。 被招聘者が複数の国際会議に参加する合間に、幸運にもセミナーを開催することができた。会計や他の会議(GVN)での予定確認などの事前準備が複雑になったが、GVN や LP 事務局、所属ラボの皆様の多大な協力のおかげで、なんとか完遂することができた。この場を借りて感謝したい。報告者自身は、研究に関わるディスカッションでは、込み入った内容で話をするのができたが、観光中の会話に少し苦心した。今後プレゼン能力だけでなく、日常時の英会話力を強化すべきと改めて感じた。	